

発表者は、本年発行した浄土宗総合研究所編『カラフルな共生社会を目指して：LGBTQ+についてみんなで考える』の編集に研究主務として携わった。本冊子は、仏教的な立場から、性の多様性とそれにまつわる社会的な課題を共に考えることを目的としている。

浄土教思想と性（セクシュアリティ）を考えるにあたって、LGBTQ+に直接言及する文献は乏しい。一方、女人成仏や女人往生をめぐる先行研究の蓄積は多くあり、前述の冊子も日本仏教学会第60回大会の福原隆善「法然上人の女人往生論」による男女の相対を超えた平等往生という学説を基調として、阿弥陀仏の救いに「性差の制限はない」とする立場にもとづく。これは女人往生研究の成果をLGBTQ+の課題へと応用したものである。

一方で未解決の課題もある。ポール・ハリソン「浄土に生まれる女たち—文献学としての仏教学の意義」は、女人往生（女性が極楽へ往生する）ではなくて、「女身往生」（女性の身のまま極楽に再生する）の可否を論点とする。論文冒頭で、台湾人尼僧が「極楽に女として再生できず、まず男に変わらなければならないというのは本当ですか」との問いに対して「浄土では男性と女性のあいだに区別はなく、そこに再生した人は男でも女でもないのです」と答えたエピソードが紹介されている。ハリソン氏は中国浄土教の伝統と古典テキスト（浄土経典の解釈）との乖離を指摘するものの、台湾人尼僧の現代的な回答は「浄土におけるLGBTQ+の存在」という視座へも示唆するところが小さくない。

そこで本発表では女人往生および女身往生という課題について、中国・新羅における当時の仏教者が女性をどのように位置づけていたのかを論究する。従来の研究は、日本仏教における女人往生説を念頭に置き、その遡及的な手法として、中国浄土教祖師の典籍へわずかに言及するにとどまっていた。本発表では宗学研究ではさほど重視されてこなかった文献も素材として取り上げる。具体的には下記の三点を考察する。

第一に仏国土における女性の有無である。阿閼仏の東方妙喜世界には女性がいて、妊娠と出産があることはよく知られている。仏国土に女性が住むことは画期的・女性解放に積極的との評価もあるが、中国ではどのように受容されたのか。迦才『浄土論』には女人の有無をめぐる極楽浄土と妙喜世界の対比が記述されるため、その論点を考察する。

第二に世親『往生論』における「女人・根欠・二乗種は極楽浄土に生まれない」という記述への対応である。先行研究では曇鸞、慧遠、懷感に関する論究はあるが、他の文献への言及は少ない。ここでは迦才『浄土論』、伝基『西方要決』を取り上げる。とりわけ『西方要決』の記述は女人に限定されない性も視野に入っていることが注目される。

第三に、『無量寿経』の因順余方説である。本来は極楽浄土に存在しないはずの人・天・声聞の名称があえて付されるというこの説は、本来的なあり方と多様な姿の両立を可能にする論理とも読みうる。ここでは義寂『無量寿経義述』等を取り上げる。

以上の議論を通じて、浄土教思想が性の多様性をどのように受け止めうるか検討したい。

【キーワード】女身往生、女人根欠不生、因順余方